

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範疇のものとして捉えて下さい。

対話的学び・深い学び・主体的学びのつながり

『育成をめざす資質・能力を育む新たな手法として登場した「主体的・対話的で深い学び」。これから先10年を生きていく先生はどうしてもマスターしなければいけない手法です。お付き合いください。

『主体的・対話的で深い学びを理解していく上では、「対話的な学び」から理解していくのが良いです。対話的な学びは、自分の持っている知識や技能を元手にしながら他人や自分との対話を通して知識の雪だるまを作っていく活動です(図1)異なる側面の知識を持っている人との対話を通す方が知識は大きくなりやすいですね。

『次に理解するのは「深い学び」です。深い学びを一言で言うと、知識を単なる知識ではなく、意味づけ、価値づけ、重みづけて、障害を通して自分から意味・価値・重みを感じながら使っていけるような知識にすることです(一言ではなかった笑。図2参照)また、「深い学び」は、その意味づけ、価値づけ、重み付けの過程を通して、「主体的学び」と密接につながっていく重要な側面もあります(意味や価値、重みがあると納得していることって、主体的に発揮されますよね。)。

『人の生涯にわたっての「主体的な」学習意欲というものは以下の三つに支えられるという動機づけのシミュレーション・モデルがあります。

〈出典:学習意欲の心理学 桜井茂男 誠信書房 1997〉※古いですが良書です。

① 自己有用感(私はそれをすることができる!やれる!)

② 他者受容感(自分の学習成果が他者に受け入れられ、プラスに働く)

③ 有意味感(この学びには意味があると感じられる)

上記の①②③(図3)があると、一過性の「主体性」ではなくて、生涯にわたる主体的な学習意欲につながるのですが、深い学びとは、まさにこの①②③の実現のために「手ごたえ」や「やりがい」、「価値づけ」、「有意味な経験との結びつき」を学習の中で感じられるようにして、生涯にわたっての学習の主体性につなげていく学びです。

単なる知識の収集に終始せず、知識を雪だるまのように大きくする学習を対話的な学びによって設定し、さらに、① 自己有用感 ② 他者受容感 ③ 有意味感 が感じられるような授業にすることが「主体的・対話的で深い学び」の実現につながります。

『「主体性」というと、その場の主体性に目を向けがちになりますが、「主体的な学び」が一過性の感覚刺激や表面上の「楽しさ」、限定された人間関係といった外発的なもの・人・ことに支えられたものではなく、「生涯に亘って主体的に学ぶ姿勢の形成」を目指していくこれからにおいては、知識を経験付け、価値付け、重みを感じ、① 自己有用感 ② 他者受容感 ③ 有意味感 につなげていくことが、私たちの授業改善の第一歩になっていくと思われます。



図1 知識の雪だるま

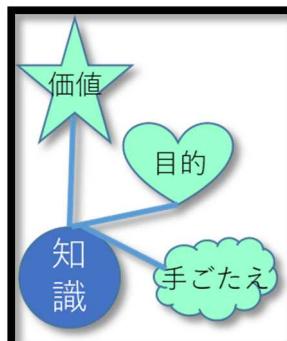
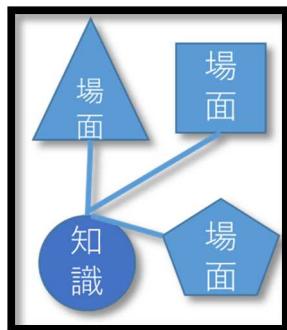


図2 知識と場面や価値手応えとの結びつき

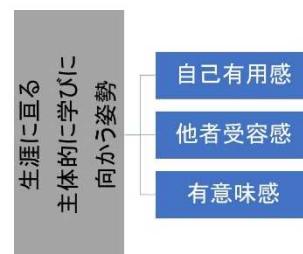


図3 障害に亘る主体的な学びを支える要素